報告

北海道スタンダード研究委員会　第 20 回勉強会

北海道の文化と芸術

正　岡　久　明

1．講演会概要

北海道スタンダード研究委員会は、これまで食・観光・歴史・交通・文化・産業などの観点で「元気な北海道」の提案に向けた勉強を行ってきました。

節目となる第 20 回の勉強会を開催するにあたり北海道を考える新たな視点「北海道の文化と芸術」について講師として河﨑様と吉崎様をお招きして勉強会を行いました。

○講演 1 ：北の文化の可能性
　講師　：河﨑　秋子　様（羊飼い・作家）
○講演 2 ：北の芸術（彫刻）
　講師　：吉崎　元章　様（札幌文化芸術交流センター SCARTS　プログラムディレクター）
○日時　：令和元年 7 月 12 日（金）18:00 ～ 20:30
○場所　：TKP ガーデンシティ札幌駅前
○参加者：36 名（会員 18 名･会友 4 名･非会員 14 名）

勉強会の様子

講演 1　北の文化の可能性

(1) 河﨑秋子様をお招きした背景

2014 年に実施された「三浦綾子文学賞」は、代表作「氷点」の連載開始 50 周年を記念した 1 回限りの賞に全国 170 作の応募があり、その中から別海町在住の河﨑秋子様の「颶風（ぐふう）の王」が見事選ばれました。そして二作目となる「肉弾」では、大藪春彦賞を受賞されています。勉強会では別海で羊飼いをしながら執筆活動をしている河﨑秋子様をお招きして、地方で創作活動をすることへの思いやご自身の経験についてご講演をお願いしました。

(2) 講演内容

河﨑秋子様のご講演の様子

三浦綾子文学賞へのチャレンジ

大学時代、文芸サークルに所属していた時に小説を書いていましたが、あまりの才能のなさに嫌気がさして一回筆を折りました。30 歳を目前にした時、いま小説を書かないと一生書かないだろうと思い、一念発起して再び書きはじめました。

2011 年・2012 年に道新文学賞を頂いた後、一般の文学賞にそれなりに出しましたが、これまた箸にも棒にもかからないことを体験して、自分にはもう小説を書くことは無理だと思っていた時に、たまたま三浦綾子文学賞がありました。

北海道で文章を書く人にとって、特に女性にとって三浦先生は神様のような存在ですから、その方の名前を冠した文学賞に挑戦することはかなり高いハードルでしたが応募しました。そして幸いなこと

に最終候補に残していただくことが出来ました。

万全の心構えで臨んだ最終選考会

三浦綾子文学賞は、公開で審査員の先生方が作品を批評した上で、残す・残さないを決めます。

文学賞の担当者の方から、審査が行われる旭川の三浦綾子記念文学館へ“いらっしゃいますか”と訊かれた時、自分の目にしたところで落ちた方がまだ諦めもつくと思い“行きます“と答えました。

大体落ちると予想をしていたので、旭川から別海まで車で 7 時間かけて帰る時の用意として、暗い音楽だけを集めた CD も作って、落ちた時の心構えを万全にして会場に行きました。公開で審査が行われ、受賞という形で結果を頂くことになりました。その時の受賞作が「颶風の王」です。内容は自分のベストを尽くしましたが、タイトルをつけるのが少し苦手で、皆さんに「難しいタイトルだね」とよく言われます。このタイトルは風や王のイメージを持たせたいと思って付けました。

颶風の王（2015 年）
（三浦綾子文学賞　受賞）

颶風の王に込めた思い

小説の背景として、江戸後期、東北は農耕に使える良い馬を育てていたことから、北海道に人が入植し開拓していく時に東北の馬がたくさん入ってきたという事実があります。

小説では、その東北の馬を一緒に連れて根室に開拓に入った男と、馬と一緒に育っていく女の子と、根室沖に実在するユルリ島という無人島に残された野生馬をモデルにしています。

小説のなかでは「及ばぬ」という言葉を出して物語を象徴させています。北海道で具体的な例を一つ挙げて言いますと、出かけようとした時に吹雪でどうしようもないことがあります。人間の努力とか、あらかじめの準備とか、その願いとか、そういったものが全く及ばないようなことが現実として確実に存在します。やれることはやった上で、諦めをつけるべき「及ばぬ」ことがあることによって、人間の世界はとても豊かになるのではないかという思いを込めて「及ばぬ」という言葉を使っています。

ユルリ島に残された馬

実際のお話と絡めて言います。生のコンブはものすごく重いので、干し場に運ぶために馬がよく利用されていました。ユルリ島でもコンブを運ぶために馬を使っていましたが、そのうち機械化され、やがて時の移り変わりとともにコンブを生産することはなくなりました。

ユルリ島の場合は、もう馬は必要なくなったので肉にするしかないという意見が出ましたが、根室の飼い主の方が「それでは可哀想だ」という思いがあって、ユルリ島に馬を放したまま置いてきたという経緯があります。これは馬主さんが決断し、地元が受け入れてきたことなので、第三者が良い・悪いということは出来ません。

価値観の対立

このような経緯でユルリ島には、放された時代の馬が 2 頭だけ残っていましたが、現実には続きがあります。2018 年、地元の観光関係の方がクラウドファンディングを使って、地域の観光の資源としてユルリ島に馬を増やそうという動きが起き、必要な資金を得て成立しました。

ユルリ島は馬にとって環境が良かったようで、元々いた馬と新しく入れた馬 2 頭は、元気で仲良くやっているそうです。ただここで少し引っかかるのは、元々いた地元の人は、馬を島に残しておくことを正しい決断として受け入れてきましたが、ある日突然、ネットを介した外部の方の価値観によって、今まで大切にしていた価値観が変わってしまったことです。

インターネットによって個人の意見が発信しやすくなった一方、地元の意見と地元以外の意見が対立しやすくなった側面があります。健全な対立は議論という意味では良いと思いますが、それによって発展するもの、もしくは停滞するものがあるのも事実です。

インターネット時代の創作活動

インターネットののどかな面として、私のような地方で創作活動をする人間にとって、とても良い時代だと思っています。二世代前・三世代前の人達は、作家としてデビューを果たしたら東京に行かなければならないと言われていたそうですが、いまは北海道で創作活動をする人が随分増えています。

私の場合、自然を題材にした内容が多いので、自分が、例えばコンクリートジャングルの中にいて自然や野生動物の話を書けるかと言われたら、多分書けなくなると思います。

肉弾（2017 年）
（大藪春彦賞　受賞）

自分との闘い

創作しているということに満足せず、他の人の意見を聞いたり、批評に耳を傾けたりしながら創作を続けるためにはエネルギーが必要です。このエネルギーはモチベーションや創作意欲と言い換えてもいいかもしれません。

例えば、もっと良いもの・もっと素晴らしいもの・みんなを納得させるもの・引き込むようなものを創りたいという意欲がモチベーションになりますが、それは人それぞれで、決してポジティブなものだけではありません。ちなみに私は、時々ネガティブなものも入れながら、自分の中でうまく変換して書き続けるようにしています。

創作する過程では様々な闘いがありますが、なかでも自分との闘いが一番大きく根本的なものです。自分は一体何を創りたいのか、何を書きたいのか、自分を掻き立てるものは何なのかをきちんと自覚して形にすることが大事です。私もなかなかそれが出来ないので目標にしています。

北海道の可能性

都市部の人間と地方の人間の価値観は、かなり違うところがあります。

小説・詩・短歌・俳句・写真・絵などの創作活動を通じて、その地域の価値観を他の地域の方と“共有する”、もしくは私は“侵食する”と表現していますが、創作物に接する人の思考や価値観を侵食していくことが、もし今後可能になればとても面白いと考えています。

北海道には理不尽な雪や吹雪が存在します。暮らしの中で厳しい冬・激しい雪・過酷な気候・荒々しい自然を経験した人間が、もしくは開拓精神で残った北海道の気質を受け継いだ人間が創作をするということは、中央の人達の目から見ても、とても価値があることだと思います。

それらを武器にして、今まで普通だと思われていた中央の価値観に、北海道の価値観で殴り込みをかけることが可能だと思います。

講演 2　北の芸術（彫刻）

（1）吉崎元章様をお招きした背景

今年 2019 年が没後 30 年になる北海道を拠点として活動した彫刻家　本田明二と砂澤ビッキの作品や人柄から感じられる「北海道の風土」「北海道らしさ」「北海道的」について、吉崎元章様の視点を通した解説をお願いしました。

吉崎元章様のご講演の様子

（2）講演内容

本田明二と砂澤ビッキの共通点

本田明二と砂澤ビッキをリクエストしていただいて、このお二人は北海道的を考える上で重要な彫刻家であり、とても良い人を選定していただいたと思っています。

実は北海道は多くの彫刻家を輩出しています。中原悌二郎・加藤顕清・本郷新・山内壮夫・佐藤忠良などの彫刻家は、北海道にすごく愛着を持っていたものの東京を拠点に活動していました。

戦後間もない当時、北海道は材料や道具の調達が難しいことに加え、厳しい寒さで粘土が凍ってしまうことや東京の公募展に作品を送るのも一苦労するなど、彫刻家にとって活動しにくい場所でした。

←本田明二（1919 ～ 1989）
↓砂澤ビッキ（1931 ～ 1989）

本田明二と砂澤ビッキ（撮影：佐藤雅英）

このお二人には様々な共通点がありますが、特に興味深いのは、一度東京で活動した後に北海道に戻って来て制作を続けていることで、北海道で制作する意義を人一倍考えていたと言えます。

本田明二

北海道に根を下ろして彫刻を生業とした最初の彫刻家が本田明二です。明二は、モチーフを具象から単純化・抽象化へ移行させながら独自の造形を追求した作家だと言えます。元々何の形だったか、何をモチーフにしていたのか、わかる範囲で留めているのが一つの特徴です。

明二は馬の作品をたくさん作っています。北海タイムスで「…本当は馬らしくない馬を彫りたいなあ。部分的に見ると馬にはちっとも見えないが、馬以外のものにはどうしても見えないって感じ。つまり馬の形を借りて、そこに造形的なフォルムを創造する…」と語っています。

馬碑
1977 年　カツラ
札幌芸術の森美術館蔵

明二の作品は馬に加え、フクロウ・やん衆・マントをかぶった人など、北国らしいモチーフが多いことから北海道を感じると言われていますが、私はそれ以上に作品の素朴さ・おおらかさ・野性味、そういうところが北海道的だと思います。本田明二の言葉を次に紹介します。これは先ほどの河﨑様のお話に通じる言葉です。“北海道らしさ”は狙って出てくるものではなく、冬や雪を経験することによって生まれ、ここで生きているからこそ、生活しているからこそ“北海道らしさ”が滲み出てくると言えます。

> 「北海道的」とか「道産子らしさ」とかは、意識して形や色で表現できるものではなく、もしその「的」とか「らしさ」というものがあるとすれば、長い冬の雪との闘いの中から育まれてくる、無形のものではないだろうか。
>
> 本田明二　北海道新聞「私の中の原風景」1985 年

砂澤ビッキ

砂澤ビッキは本当に木だけを素材とした作家です。

初期の作品は、何か木の中に潜む、うごめくような生命感、あるいはもう目に見えない自然の中に漂う魑魅魍魎（ちみもうりょう）的な不思議な存在への意識というものが感じられます。

ビッキは大自然の中にいるからこそ感じられるものを大切にするため、1978 年に札幌から音威子府に拠点を移しました。少し足を運ぶと大森林から感じる畏敬の念や目に見えない自然の力を作品に表現しようとしています。

ビッキは、木が元々持っているものを大切にし、その声を増幅するような形で表現して、「神の舌」や「四つの風」などを削り出しています。これは「四つの風」という作品です。最初設置された頃は、切って来てすぐに削った生木で、みずみずしい木の色をしていましたが、日が経つにつれて

四つの風
1986 年　アカエゾマツ
札幌芸術の森美術館蔵

だんだん灰色に変わって、ひび割れして来て、キノコが生え、キツツキが穴を開け、自然に任せてどんどん朽ちて、遂には倒壊していくことになりますが、それを美術館は容認していました。なぜかというと、彼がそれを望んでいたからです。「四つの風」に寄せたビッキの文章からも、その思いが伝わってきます。

> 私はよく自然の中を彷徨するけれども、自然を探求したり理解しようとはあまりしていない。自然と交感し、思索する。そこに、あからさまな自己が見えてくる。自然が手を加えない状態、つまり、自然のままの樹木を素材とする。したがってそれは生きものである。生きものが衰退し、崩壊してゆくのは至極自然である。それをさらに再構成してゆく。自然は、ここに立った作品に、風雪という名の鑿を加えてゆくはずである。
>
> 砂澤ビッキ　札幌芸術の森野外美術館図録（1986 年）

作品の共通点

お二人の作品は、北海道をあえて前面に押し出していません。北の地で生きていなければとうてい気づかない視点と、日々の生活から滲み出てくるものこそが本物だという思いで「北海道観」や「自然観」を追い求めて、それを現す作品を作り続けたことがお二人に共通しています。

北海道的とは何か

北海道的とは何かを考える時に、私は思い出す画家の言葉があります。小谷博貞は札幌一中出身で、多摩美術学校に進み、東京で画家として活躍していましたが、1957 年、実家の都合で札幌に帰らざるを得なくなり、その後札幌で作家活動を続けています。

1973 年、北方ジャーナルに寄せた「冬眠画家の寝言」は、中央画壇で活躍した経験がある彼が、北海道で制作する意味、すなわち北国の冬を経験するからこそ蓄積される逞しさで、これから画家として臨んでいく決意を綴った文章です。これを読むとすごく心に沁みます。

この文章を発表した後、彼は北国でなければならないものを追求して、説明的なものをそぎ落とし、直線的な形態と色彩に北方性や開拓心を盛り込む画風を確立していきます。

> 帰郷して 15 年目のいまほど、ぼく自身を北海道の人間だと思ったことはありません。日本の画壇からすれば、冬眠を続けている圏外の、価値の無い存在です。しかし、冬眠は惰眠と違います。北方のきびしい風土の中で、自分をみつめ、人間の生と死を、自分の体温を保ちながら思考する時間なのだと思います。この時間の経験こそ、北国の人間に大切なのだと思います。この時間が、やがて北海道の精神文化の伝統を、まだ浅い歴史の上に、生み出していくのだと思います。冬眠には透明な詩があります。吹雪のうねりが、氷雪の痛みが、そして春を待つ希望が含んでいます。画壇の騒音から遠く、深い雪の中に埋もれて、エネルギーを蓄積している北国独自の日常性が、逞しく存在しています。冬眠画家に徹したい、北海道の画人でありたい、つくづくそう思うのです。
>
> 小谷博貞　北方ジャーナル（1973 年）「冬眠画家の寝言」

本田明二と砂澤ビッキの親交について

―会場からの質問―

本多明二と砂澤ビッキは、同じ時期に彫刻活動をされており、お二人とも内面から滲み出るものが結果として北海道らしい作品になっていると理解しました。ここで質問ですが、お二人はお互いに影響し合っていたのでしょうか。

―吉崎講師―

お二人にどれだけ交流があったか、私は深く知りませんが、今日は明二さんのお嬢様が来ていますので直接聞いた方が良いと思います。いかがでしたか。

―長女　近藤泉様からの回答―

父はビッキさんのことを、親しみを込めてビッキ、ビッキと呼んでいました。師弟関係はありませんが、ビッキさんも父を随分慕ってくれていたようです。

二人はお酒が好きだったこともあって楽しいお話をよくしていたので、お互いを認めていたと思います。

一緒のグループ展を率先して開くことはなかったと思いますが、美術館が企画した彫刻展に作品を一緒に

長女の近藤　泉　様

出していました。そして薄野で一緒になることも多々あったのかも知れないと思います。

2. 勉強会で学んだこと

北海道の価値

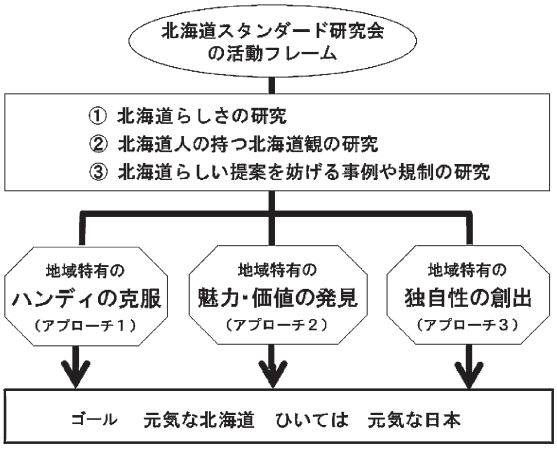
河﨑秋子様と吉崎元章様から教えていただいた北海道の価値を紹介します。それぞれ表現する言葉は異なりますが、その価値の捉え方には共通するものがあります。

河﨑秋子：	北海道には理不尽な雪や吹雪が存在する。厳しい冬・激しい雪・過酷な気候・荒々しい自然を経験した人間が創作をすることに価値がある。
本田明二：	「北海道的」とか「道産子らしさ」とかは、意識して形や色で表現できるものではなく、長い冬の雪との闘いの中から育まれてくる無形のものである。
砂澤ビッキ：	大森林から感じられる畏敬の念、目に見えない自然の力を感じるために自然と交感し、思索する。
小谷博貞：	吹雪のうねり、氷雪の痛み、そして春を待つ希望が、エネルギーを蓄積している北国独自の日常性が逞しく存在する。
吉崎元章：	冬や雪を経験し、北の地で生きていなければとうてい気づかない視点で、日々の生活から滲み出てくるものこそが本物である。

北海道スタンダード研究委員会の“これから”

当研究委員会は、北海道が元気になる提案を発信することを目的として、これまでは 3 つの視点を並列に捉えてアプローチしてきました（下図参照）。

今回の講演でお聴きした創作家に文芸・彫刻・絵画の違いがあっても、奇しくも通底するものは「北海道に、冬や雪にとことんこだわり、それを自分の中で昇華させて、自身が感じるものを創作する姿」です。これは当研究委員会が掲げる 3 つの視点、「ハンディの克服」「魅力・価値の発見」「独自性の創出」と合致すること、そしてこの 3 つの視点を直列でアプローチすることだという気づきを得ました。これから当会は、今回の講演で教えていただいた新たなアプローチを加えて「元気な北海道づくり」に向けた取組を、より一層進めていきたいと考えています。



3. 講演を聴き終えて

河﨑秋子様～北の文化の可能性～

講演で河﨑様が本音として語られた、創作を続ける上での様々な葛藤とそれに立ち向かう気概、そして北海道に暮らすものの価値観を何より大切にして社会に挑み続ける姿勢にとても共感しました。

河﨑様は今年で羊飼いをやめ、来年からは作家として執筆に専念されるとお聞きして、これまで以上に作品に触れる機会が多くなることを今から楽しみにしています。

吉崎元章様～北の芸術（彫刻）～

かつて現実としてあった北海道で創作活動をすることが困難な時代において、北海道で創作することにこだわり続けた彫刻家　本田明二と砂澤ビッキについて、吉崎様の深い造詣とあたたかい眼差しを通して奥深いことをご教示いただいたことは、感謝の念に堪えません。

今後、道民にとって北海道の芸術がより身近になることを願って、微力ながら当会でもこのテーマに取組んでいきたいと考えています。

※本稿は北海道スタンダード研究会の掲載許可を得ています。
※　北海道スタンダード研究会 HP　http://hokkaido-std.com/

正　岡　久　明（まさおか　ひさあき）
技術士（建設／総合技術監理部門）
北海道スタンダード研究委員会　副代表
株式会社　シー・イー・サービス
e-mail:masaoka.h@ces.co.jp